

文藝春秋 54 12月号 (菊池寛きんのさす)

真摯な記者魂

〈柴田穂氏〉

中嶋嶺雄  
(早稲田大学教授)

建国三十年を経た中国は、いま、巨大な転換を遂げつつ蠕めいている。そして、文化大革命がまさに大いなる虚妄であったことは、もはや誰の目にも明らかになった。

とはいえ、こうした現代中国の激動の過程を、自らの報道の真実とその責任に照して記述し得たジャーナリストが、わが国にどれほど存在するであろうか。

柴田穂氏がこの点で貴重な例外的存在であることは、周知のところである。その柴田氏は、中国自身が文化大革命を清算しようとはじめたとき、『毛沢東の悲劇』を克明に記録しはじめた。私はその第一、第二巻を読んだが、その手法は、資料によって実証的に経過をあとづけつつ、まさに大河小

説のようにドラマを再構成しようとするものであり、おのずと読者をして真迫感にひたらせるあたり著者が中国分析の鋭さとともに、ジャーナリストとしての見事な構成力と文章力を有していることを示している。

著者として、ここまで執念的にこの大作に取り組ませた動機は、おそらく、凡百の中国報道や文革論の虚偽にたいする怒りであり、中国の現実をリアルに報道すべきだという真摯な記者魂であったにちがいない。

かつて文革初期に毎日新聞社の外信部による『燕山夜話』の訳業が菊池寛賞を受けたことを想うとき、あれから十余年、反革命の書といわれた『燕山夜話』が中国で再刊された今日の時点で、柴田氏の功績がこうして改めて評価されたことは、大いに慶賀すべきことであり、また印象深いことでもある。これを機に氏が初心を忘れず、問題を深めて下さることを期待してやまない。

無名の星々の星座図

〈文學界同人雑誌評グループ〉

柴田翔  
(作家)

『文學界』同人雑誌評を書き続けられてきた四人の方が菊池寛賞を受賞されたことに、心からのお祝いを申し上げたいと思います。それは勿論、かつてその同人雑誌評によってものを書く生活に入ったもの、ひとりとしての、個人的な感謝をこめたお祝いでもあります。それが同時に、その方々のお仕事が新人発掘への寄与という直接的な意味を越えて、日本での文学的営みへの更に大きな意味をも併せ持っていると考えているものからの、長年のご労苦への讃嘆と感謝でもあります。

ひとつの時代の文学は、夜空に輝く無数の星々のようなものと言えましよう。時代を代表するいくつかの傑作が一際明るく輝いて、人々の眼を奪うことは当然です。

例えば『照葉狂言』『田舎教師』『心』のつくる三角形は、その時代全体の姿を予感させます。しかしいかなる傑作も、そのみで現実のすべてを表現することはできません。決して言い尽せぬ現実の多様性は、無数の星々のつながり、それらの星々がつくる様々な星座、その様々な星座が構成する天空によって、始めて暗示可能です。そして、それ自体としては弱い光しか発しえぬ無名の星々も、その星座、天空を形づくるものとして、欠けてはならぬ役割を負っています。

今度受賞された四人の方が長年にわたって果されたお仕事は、そうした無名の星々がつくる星座図の克明な記録であったと、私には思えます。今から五十年後、百年後の批評家、研究者が、昭和後期の傑作について語ろうとする時、これら無名の星々の星座図は、その傑作がどんな夜空を背景に輝いていたかを知るために不可欠の資料となるのです。

菊池寛賞受賞を喜ぶ

門は開かれた

〈山口瞳氏〉

高橋義孝

(桐朋学園大学教授)

先年山口瞳君が直木賞を授けられた時の受賞記念パーティの席上で、私は、こういう名誉ある賞を授けられても、その後、目覚ましい文学活動を行うことなく、いつとはなしに文界から姿を消してしまふような人もいるが、どうか山口君はそういうことにならず、今後は一層精励して活発な文学活動を展開して貰いたいと挨拶した。そして山口君は私の期待にそむかず、旺盛に仕事をし続け開始してきた。

山口君にとっては未知の人に、山口君を紹介するような場合、私は「作家の山口さんです」と云う

のをつねとしていたが、実は私の氣持には、この「作家」という言葉にいつも多少ひっかかるものがあった。山口君の仕事は Feuilletonist のそれであることが多かったからである。つまりいい意味での雑文家である。山口君を志賀直哉や島崎藤村のような「作家」とは見做しがたかったからである。これは多才な東京人の避け得べからざる宿命なのかも知れない。そこへ持ってきて今回の菊池寛賞の受賞だ。この絶好の機会に、ぜひ山口君は「雑文家」を廃業して「作家」として起って貰いたい。また受賞対象となった作品が注目を浴びたのは、この作品の材料のためでもあった。下世話な言葉を使えば、この作品にはネタのよさで喰わせる餌のようなどころがある。この作品を人に読ませたのは、作者の筆力、描写力ではない。私は、まさにこの一作を切っかけに、山口君が真の「作家」への途を辿り始めるときはきたと思っている。妄言多謝。

歌舞伎を世界に

松竹演劇部  
歌舞伎海外公演スタッフ

河竹登志夫

(演劇評論家)

「歌舞伎は旅する大使館」とは、去年の訪豪公演のとき、現地某新聞がかかげた名評だ。まさにそのとおりで、文化ことに生身の役者による演劇ぐらい、一国を代表するものはない。昭和三年の二代目左團次訪ソらしい、歌舞伎の海外公演が日本の文化外交に果たした功績は絶大だ。受賞は当然である。

舞臺や能・狂言は上流のものとされてきたから、明治時代から外国にも紹介されたが、庶民が生き育てた歌舞伎は、松竹のプロジュースによるこの十四回の外国公演によって、はじめて世界のものとなったのだ。

「世界の歌舞伎」を口にしてきた大谷竹次郎さんが、地下でどんなに

そう、昭和三年、最初の訪ソ公演の団長だった城戸四郎さんも、数年前に世を去った。

いや、そればかりか、左團次、猿翁から、戦後の海外行において、こうした事業に最も大切な「和」のかげの功労者だった小道具藤浪与兵衛君まで、物故した人もすくなくない。

こうした人々、関係全員的一致協力により、毎回最高の質の舞台を見せてきた——それが、歌舞伎を世界のものにしたのだと思う。私も、二十年前の昭和三十五年の訪米公演から、訪ソ、訪欧、そして去年の訪豪まで前後五回、文芸顧問として解説や反響調査のため同行、ささやか乍らお手伝いしてきたのでこの受賞は人ごとと思えず、ほんとにうれしい。また、この仕事の意義をふかく理解し、促進助成にあたってきた国際交流基金(旧国際文化振興会)もえらい。あの国この国での、熱狂した観客の顔、顔……が浮かぶ。松竹さん、おめでどう!